HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	林鵞峰『論語集注私考』について : 明代の著作の引用状況と『論語』解釋の特徴
Author(s)	関, 雅泉
Citation	研究論集, 17, 1（右）-14（右）
Issue Date	2017-11-29
DOI	10.14943/rjgsl.17.r1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67984
Type	bulletin (article)
File Information	17_011_guan.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.17.r 1

林鵞峰『論語集注私考』について
明代の著作の引用状況と『論語』解釋の特徴

関　雅泉

要旨

國立公文書館に所藏されている林鵞峰の『論語集注私考』は、『論語』に關する解釋書である。鵞峰は林家の繼承者として、その學風は父の羅山から大きな影響を受けている。彼は朱子『論語集注』に基づいて解釋を加え、明代の著作を屢々引用し、強い關心を示している。本稿では、『論語集注私考』における明代の著作の引用状況及び鵞峰の解釋について考察し、さらに朱子『論語集注』と對比しながら、鵞峰の『論語』解釋の特徴を明らかにしたい。結論として、鵞峰は明朝から新しく渡來した書物を積極的に涉獵し、新古注を折衷する清原家の學問とは異なる見解を示している。また、『論語』解釋には朱子と違う點があるが、全體的にみれば、鵞峰の解釋の特徴は朱子の『論語』解釋を踏襲し、異學を排擊する朱子學一尊主義にあることは明らかである。

はじめに

林鵞峰（一六一八～一六八〇）、名は又三郎、春勝。後に『論語』里仁篇の「忠恕之道」により、恕と改名している。字は子和、之道。鵞峰はその號。他に春齋、向陽軒とも號する。江戸時代初期の儒學者。林羅山（一五八三～一六五七）の三男。まず、國立公文書館所藏『鵞峰先生林學士集』（二四〇卷）の附録「自敘譜略」によって鵞峰の生涯を概觀しておこう。

元和四年、鵞峰は京都新町に生まれた。三歲の時、次兄の長吉、十二歲の時、長兄の敬吉が夭折した。羅山の死去後、その繼承者として德川幕府の文教、外交に關與していた。十三歲の時、五經を習った。羅山は彼のために『尚書』『左傳』などを講じた。十四歲の時、『史記』『漢書』『十八史略』などの史書を讀み、十五歲の時、『大學諺解』（羅山著、別名『大學章句解』、國立公文書館所藏寫本三冊有

り）及び『論語』『孟子』『中庸』『四書大全』などを讀んだ。十六歳の時、那波活所（字は道圓、藤原惺窩の弟子）が彼のために『孟子』及び『春秋胡氏傳』を講じた。十八歳の時、湯島聖堂で『論語』首章について講義を行った。二十三歳から四十五歳にかけて、『詩經集傳』『書經蔡傳』『春秋胡氏傳』『禮記』『易學啓蒙』『周易本義』などを講義した。四十四歳の時、父羅山と同じく法印を授かった。二年後の寛文三年（一六六三）十二月二十六日、幕府は唐の時代の官署「弘文館」に倣い、林家の家塾を「弘文院」と改稱し、鵞峰に弘文院學士の號を賜った。これによって鵞峰は儒學者として仕官することになった。四十七歳から五十三歳まで、羅山を手傳い、漢文の編年體史書『本朝通鑑』（三一〇卷）を編纂した。その後、閲讀、講書、編著を再開し、六十二歳までに『詩經私考』『朱子感興詩私考』『本朝言行録』『論語諺解』『孟子諺解』及び「毛詩序私考」「尚書序私考」「左傳序私考」等などを著した。延寶八年（一六八〇）、病氣で逝去。享年六十三歳。

國立公文書館所藏の『論語集注私考』は鵞峰が著した朱子『論語集注』に關する漢文の解釋書である。上、中、下三冊ある。上冊は、朱子「論語序説」に對する解釋である。中冊は、學而篇（第一章～第四章）、及び爲政篇（第一章～第三章、第九章～第十五章）の解釋である。下冊は、八佾篇（第一章～第四章、第十四章～第十九章）、及び里仁篇（第一章～第五章）の解釋である。本書は、朱子『論語集注』全體の解釋ではなく、「論語序説」の全文及び『論語』前四篇の一部の内容について解釋を加えたものである。

これまでの研究では、鵞峰の『論語』解釋に關する研究が重視されていない。この空白を埋めるために、本稿では、『論語集注私考』を中心資料として取り上げて、明代の著作の引用状況について考察を加え、さらに朱子の注釋と對比しながら、鵞峰の『論語』解釋の特徴を明らかにしたい。なお、『論語集注私考』を引用する場合には、原文を附記することとした。紙幅の都合で原文を省略したところもある。

一、明代の著作の引用状況

『論語集注私考』を讀むと明代の著作が屢々引用されていることに氣づく。そこで、鵞峰はどのような見地から引用しているか探るために、『論語』の意味、その編纂者、及び孔子について、鵞峰の解釋を取り上げてみよう。

（一）『論語』の意味

『論語』という言葉について、班固『漢書』藝文志には、「『論語』は、孔子、弟子・時人に應答し、及び弟子相ともに言ひて、夫子に接聞するの語なり。當時、弟子各〻記す所有り。夫子既に卒し、門人相ともに輯めて論纂す。故に之を『論語』と謂ふ」と解説しており、「論」を編輯、編纂の意味としている。鵞峰も、「『漢書』藝文志に曰く、論は、撰なり、次なり。聖門弟子、孔子の問答の語を撰次す。故に名づくるなり（『漢書・藝文志』曰、論、撰也、次也。聖門

弟子撰次孔子問答之語。故名焉）（『論語集注私考』上册）と述べており、藝文志を引用している。ただ、この解釋で引用されたのは、藝文志の原文ではなく、『鼇頭評註四書大全』一（國立公文書館所藏、全二十二册）に載っている呉程（生沒年不詳）の説によるものである。『鼇頭評註四書大全』卷一「論語集註大全卷之一」に、「呉氏程曰く、『論は、撰なり、次なり。孔子及び弟子の語を撰次するなり』」とある。鵞峰『論語序説考解』（國立公文書館所藏）にも、「今按ズルニ、呉程ガ説ハ、『漢書』ニ本ヅケリ。『論語』二字ノ義、是ヲ正説トス」と述べ、呉程の解釋を正しい説としている。「論」を「撰」、「次」と解釋するのは、呉程から始まったのではない。鄭玄は「論とは、綸なり、輪なり、理なり、次なり、撰なり」（『論語注疏』序解）と解釋している。鵞峰は、「按ズルニ、呉程『撰次』説、『撰』鄭玄五説而取之也。然モ「次」ノ字ノ義不同」（『論語序説考解』）と述べ、「撰」の意味は同じだが、「次」の意味は違うと區別している。しかし、どのように違うかについて論及していない。

『四書大全』は明の永樂十三年（一四一五）に胡廣らが成祖の敕令により、宋・元の理學者の解釋を網羅し編纂した注釋書であり、明代においては、科舉試驗の基準として重視されたが、顧炎武（一六一三～一六八二）や王夫之（一六一九～一六九二）らに酷評されている。顧炎武『日知録』では、「經學の廢するは、實に此より始まる」（卷十八「四書・五經大全」）と批判し、王夫之『讀四書大全説』でも、『大全』が朱子『集注』の精神を損なうと批判している二。さらに、『四庫全書總目提要』でも、「其の説、皆、抵牾支離なり。書中の問答も、亦た皆粗淺にして、朱子の語に類せず」と述べ、編纂の杜撰や剽竊の疑いを指摘している。

ところが、羅山は、『四書大全』を朱子『集注』に基づいて編纂されたものとして、強い關心を持って、次のように述べている。

（羅山先生）又曰く、朱子『論語集注』竝びに『或問』を作り、『學』『庸』『孟子』を加へて、以て四書と爲す。今、行ふ所の『集注』是れなり。歴代先儒の注釋は多々にして、然れども『集注』を超ゆること無し。故に明の太宗、名儒四十餘人に命じて、『集注』に本づいて、諸家の説を分ちて附し、『四書大全』を爲さしむ。（又曰、朱子作『論語集注』竝『或問』、加『學』『庸』『孟子』以爲四書、今所行『集注』是也。歴代先儒之注釋多多、然無超於『集注』。故明太宗命名儒四十餘人、本於『集注』、分附諸家説爲『四書大全』。）（『論語集注私考』上册）

鵞峰も『論語序説考解』では、「夫れ『四書五經大全』とは、永樂天子の輯むる所、專ら程朱の説を以て主と爲す。當時の名儒の公論なり（夫『四書五經大全』者、永樂天子之所輯、專以程朱之説爲主、當時名儒之公論也）」と述べている。

羅山父子は、『四書大全』は永樂帝の敕命により、朱子の説に準じた宋元の名儒の公正な論議を載せた書物であると考えている。『論語集注私考』の全體からみると、『四書大全』の引用は百箇所以上もあり、鵞峰がこの書物を重要視したことが分かる。そのため、『論語』の意味についての解釋は、『大全』にある呉程の説を正しい説としている。では、なぜ呉程の説を鄭玄の注と區別したのか。鵞峰『論語

序説考解』では、次のように述べている。

本朝古來、『論語』ヲ講ズルモノ、何晏、邢昺ガ注疏ヲ用、朱子四書ノ章句集注傳來ノ後モ、藤兼良公竝清家ノ徒、『學』『庸』ハ朱子ノ注ヲ用レドモ、『論』『孟』ハ、猶古注ヲ用フ。先考（羅山）十八歳ノ時、京都四條町ノ宅ニテ、始テ『論語集注』ヲ講ズ。

鵞峰によれば、日本で、初めて朱子『論語集注』を講じた人は、父の羅山であった。その前に、藤原兼良や明經道を專攻した清原家は、朱子の新注と古注を折衷して四書を講じた。『大學』と『中庸』は朱注で講義し、『論語』と『孟子』は古注で講義したというのである。しかし、朱子『集注』には『論語』の二字の意味についての解釋がないため、羅山は清原家などの學問と區別するために、『四書大全』にある呉程の説に從ったと思われる。

室町時代以降、大學寮で經書の講義を擔當した清原家では、朱子の『大學章句』と『中庸章句』に對して訓點を加えて、さらに『大學抄』『中庸抄』を著した。一方、『論語』と『孟子』については、朱子の『論語集注』『孟子集注』には依らず、古注を用い續けた。ただし、清原家の『論語抄』では、講説の三割程度に朱注を利用している[三]。

（二）『論語』の編纂者

『論語』は誰の手によって成立したのかに關しては諸説ある[四]。上述の『漢書』藝文志以外に、ほかの説もある。『論語注疏』序解では、「仲弓、子游、子夏ら撰定す」という鄭玄の説を引用している。中唐の柳宗元は、「蓋し樂正子春、子思の徒ともに之を爲すのみ」（『柳河東集』巻四「論語辯」）と言う。南宋の陸九淵は、「王肅、鄭康成謂へらく、『論語』は乃ち子貢・子游の編む所なりと。亦た攷ふべき者（こと）有り」（『陸九淵集』巻三十五「語録下」）と言う。朱子は、程伊川の説を引用して、「『論語』の書、有子・曾子の門人に成る。故に其の書、獨だ二子のみ、子を以て稱す」（『論語集注』）と述べている。

『論語』の編纂者について、鵞峰は次のように述べている。

魏の何晏「集解序」に曰く、「魯『論語』二十篇、皆、孔子の弟子の諸善言なり」と。一説に曰く、「子貢、子游の輩、此の書を著す」と。宋の陸九淵は此説を取る。然れども正證有らず。或ひと曰く、「仲弓の輩、之を作る」と。柳宗元曰く、「曾子の門人・樂正子春、子思等、之を集む」と。（魏何晏「集解序」曰、「魯『論語』二十篇、皆孔子弟子諸善言也。」一説曰、「子貢、子游之輩[五]著此書。」宋陸九淵取此説。然不有正證。或曰、「仲弓之輩作之。」柳宗元曰、「曾子門人樂正子春、子思等集之。」）（『論語集注私考』上册）

鵞峰は陸九淵の説に證據がないと評したが、他の説に評を加えていない。さらに、彼は次のように明代の張燧（生沒年不詳）『千百年眼』を引用している。

『千百年眼』に云ふ、「『論語』の記する所は、孔子と人との問答なり。門弟子に比及（いたつ）ては、皆、其の名を斥け、未だ字を稱せざるは、顔、冉の高弟と雖も、亦た回、雍と曰ふ。閔子に至り

て、獨り子騫と云ひ、此の書を終ふるまで、名を指すこと無し。然らば則ち『論語』は、曾子、有子の門人より出でて、又、安くんぞ閔氏の門人より出でざるを知らんや」と。（『千百年眼』云、「『論語』所記孔子與人問答、比及門弟子、皆斥其名、未稱字者、雖顏、冉高弟、亦曰回、雍、至閔子獨云子騫、終此書無指名。然則『論語』出於曾子、有子之門人、又安知不出於閔氏之門人耶。」）（同上）

この内容は『千百年眼』（十二巻）巻二「『論語』出閔子門人手」に見える。『論語』では、孔子の高弟の顏淵・冉有は名前で呼ばれているが、閔子騫一人だけは字を稱されている。したがって、『論語』の編纂者は閔子騫の弟子であるという。張燧は程子と朱子の説に反對してこの説を唱えている。『千百年眼』は清朝に禁書とされ「四庫全書全燬書目」に記載されている。程朱理學に反する心學的な書物とみなされたが、明末清初に日本に傳來し、大きな影響を及ぼした[六]。

鵞峰はいったいどういう見地からこの著作を引用したのか。『鵞峰林學士文集』には、羅山の設問に對する鵞峰の答えがある。彼は、「此の書（『論語』）の撰者の諸説、皆非なり。程子曰く、『有子・曾子の門人に成る』と。是れを以て正と爲して可なり（此書撰者諸説皆非也。程子曰『成於有子、曾子之門人』、以是爲正而可也）」（第五十六巻「論語」）と述べ、程子の説を支持している。さらに、張燧の『千百年眼』について、「陽に朱子を尊び、或いは先生と稱し、或いは夫子と稱するも、而れども其の學術を信ぜず。却つて象山・陽明を推舉し、且つ老莊・釋氏を以て異端に非ずと爲す。其の眼、何んぞ明らかならんや。（中略）故に今、一覽する後、之を緘封し篋底に藏し、兒輩をして之を見しめず（陽尊朱子、或稱先生、或稱夫子、而不信其學術、却推舉象山、陽明、且以老莊、釋氏爲非異端。其眼何明乎。（中略）故今一覽之後、緘封之藏於篋底、不使兒輩見之）」（『鵞峰林學士文集』第四十八巻「論千百年眼」）と酷評している。鵞峰は『論語集注私考』では『千百年眼』を引用しているが、張燧の説には贊成せず、心學系の書物として排斥しているのである。

（三）孔子について

朱子「論語序説」では『史記』孔子世家を引用し、「孔子、名は丘、字は仲尼。其の先は宋人なり。父は叔梁紇、母は顏氏。魯の襄公二十二年、庚戌の歳、十一月庚子を以て、孔子を魯の昌平鄉の陬邑に生む」と述べている。「子」の意味については、何晏は、「男子の通稱」（『論語注疏』學而篇）という馬融の説を引用している。これは一般的な解釋であると思われる。羅山も、「凡そ先儒を指して『子』と稱するは、之を崇むるなり。顏・曾・思・孟、皆『子』と稱す。且つ後世の董子・韓子の類、周・程・張・朱、皆『子』稱するは、皆是れ師を尊ぶの詞なり（凡指先儒稱『子』者、崇之也。顏、曾、思、孟皆稱『子』。且後世董子、韓子之類、周、程、張、朱皆稱『子』者、皆是師尊之詞也）」（『論語集注私考』上册）と説いて、「子」を先師の尊稱としている。これについて、鵞峰は次のように述べている。

『孔聖全書』に曰く、「孔氏は子姓より出づ。契より湯に至るまで、湯より微子啓に至るまで、啓より正考父に至るまで、凡そ三十七世、皆子姓に從ふ。考父の子の孔父嘉、別に公族と爲る。其の子孫、遂に孔を以て氏と爲す。故に孔子、嘗て自ら謂ひて曰く、『丘、殷人なり』」と。（『孔聖全書』曰、「孔氏出自子姓。自契至湯、自湯至微子啓、自啓至正考父、凡三十七世、皆從子姓。考父之子孔父嘉七別爲公族、其子孫遂以孔爲氏。故孔子嘗自謂曰『丘、殷人也』。」）（同上）

『孔聖全書』は明代の蔡復賞（生卒年不詳）撰。彼は「子」を敬稱ではなく、孔子の姓としている。ちなみに、『四庫全書總目提要』では、この書物について、「其の間、鄙俚荒唐し、厖雜割裂なり。鬼神怪誕の語、優伶褻諢の詞、載入せざる無し。之を聖人を侮ると謂ひて、可なり」と酷評している。

また、『史記』には、「紇は顔氏の女と野合して孔子を生む」とある。司馬貞『史記索隱』によると、「野合」は、禮儀に合わない婚姻である。これに對して、鵞峰は、「按ずるに、『孔子通紀』に曰く、野合は蓋し年相當せざるを指すのみ（按『孔子通紀』曰、野合蓋指年不相當耳）」と述べている。潘府（一四五三～一五二五）は『史記』の記載の誤りを指摘して、「『史記』の傳ふる所は、『叔梁紇は顔氏の女と野合して孔子を生む』と。其の説、謬ること甚しきこと、益々見るべし。或ひと云ふ、『野合は、蓋し年相當せざるを指すのみ』と、未だ是否を知らず（『史記』所傳『叔梁紇與顔氏野合而生孔子』、其説謬甚、益可見矣。或云、『野合蓋指年不相當耳』、未知是否）」（『孔子通紀』卷二）と述べている。鵞峰は潘府の説に從っている。

全體からみると、『論語集注私考』では、上述した著作のほか、陳鎬『闕里誌』、蔡清『四書蒙引』、張居正『四書直解』など、數多くの明代の著作を引用している。なかには、中國の後世の學者から高く評價された書物もあるが、酷評され禁書とされたものもある。『論語集注私考』で引用した明代の著作について、鵞峰は全部肯定的に引用しているわけではない。彼は、「夫の粗低の書、新奇の説の若きは、其の多聞を廣ぐるのみ（若夫粗低書、新奇之説、廣其多聞耳）」（『鵞峰林學士文集』第十二卷「論語諺解跋」）と述べているように引用したのは、知識を廣げるためであった。彼は中國から傳來した新しい學問に強い關心を示す一方で、反朱子學的な著作には批判を加えている。また、注目すべき點は、彼が明代の著作を屢々引用した一つの目的は、前述のように、林家の學問が新古注折衷の清原家と異なっていることを示すためであったと考えられる。

二、鵞峰の『論語』解釋の特徵

朱子學を信奉した鵞峰は、『論語』を解釋する際、忠實に朱注に從ったのか、獨自の見地を持っていたのか。次に、「學而時習之」章、「其爲人也孝弟」章、「吾與回言終日」章、及び「子入大廟」章を取り上げて、朱子の説と對比しながら、鵞峰の解釋を分析してみたい。

（一）「學而時習之」章の解釋

學而篇の第一章に、「學んで時に之を習ふ、亦た説ばしからずや。朋有り遠方より來る、亦た樂しからずや。人知らずして慍らず、亦た君子ならずや」という孔子の言葉が見える。この章について、さまざまな解釋がある[八]。朱子は、「學」について、「學の言爲る效ふなり。人の性は皆、善なり、而れども覺るに先後有り。後覺者は必ず先覺の爲す所に效へば、乃ち以て善を明らかにして其の初に復す可きなり」（『論語集注』）と解釋し、「學」は「效」であり、後覺者が先覺者に倣って、善を明らかにして自分自身の本來の善性に復歸する行爲であると考えている。朱子は、人の性を本然の性と氣質の性の二つに分ける[九]。本然の性は人々が生まれつき持っている純粹至善なものであるが、各人の受けた氣の清濁により差異がある。氣が清であれば、至善な性はそのまま顯現できるが、濁であれば、その性は暗くなるので、「學」によって本然の性へ復歸する必要がある。「學」は、朱子の工夫論に關わっている。朱子はまた、「學んで習ひ、習ひて説ぶ。凡そ學は皆然り。大小を以て間つる有らざるなり」（『論語或問』卷一・學而第一）と述べ、「學」と「習」、そして「説」は、一切の學問を貫くので、大學と小學を隔てることがないと考えている。さらに、「學」の實踐性を重視して、「『學』という字はもともと定まらない字だ。もしただ「仁」と言うだけなら、次第に無形體になってしまう。いわゆる『學』とは、一つ一つの物事を學ぶべきだ。そうすれば着實になる（『學』字本是無定底字、若止云仁、則漸入無形體去了。所謂『學』者、每事皆當學、便實）」（『朱子語類』論語二・學而時習之章・第五十七條）と述べ、仁だけを學ぶことに反對し、具體的な事每に「學」を實現させると主張している。

これに對して、鵞峰は羅山の説を引用して、次のように述べている。

羅山先生曰く、「夫れ學とは、唯だ書を讀み文字を知るのみに非らず。人の性、本もと善なり。聖賢と雖も、異なる無し。然れども氣稟の拘する所、人欲の蔽ふ所と爲る。故に性善を知らず。古の聖賢は、學んで覺る。其の覺るは己を先す。己も亦た性善を明らかにして仁義有るを知れば、則ち其の初に復するなり。是れ學なり」と。（羅山先生曰、「夫學者、非唯讀書知文字。人性本善、雖聖賢無異。然爲氣稟所拘、人欲所蔽、故不知性善。古聖賢學而覺、其覺先於己。己亦明性善而知有仁義、則復其初也。是學也。」）（『論語集注私考』中册）

朱子の解釋と比べてみると、羅山にとって、「學」とは、善を明らかにして仁義を知ることであり、本を讀んで字を知るだけという低い段階で止まってはいけないのである。羅山は朱子より道德を學ぶことを重視している。鵞峰も羅山の説に從って、「『學』の字、『説命』より出づ。今、按ずるに學に大人・小人の學有り。此の學は、則ち大人の學なり（「『學』字出於『説命』。今按學有大人、小人之學、此學則大人之學」（同上）と解釋している。『尚書』商書・説命下には、傅説が武丁に「學」について進言したという記載がある。鵞峰はこれを「學」の出處であると考えている。彼は、「學」の意味は灑掃、應對などを教える「小人の學」ではなく、修己治人の道を教える「大

人の學」、つまり先王や聖賢の學であると明言している。「學」に關する羅山と鵞峰の解釋は、朱子と異なると言える。

また、「慍」について、何晏の注には、「慍は、怒なり」とあるが、朱子『集注』では、「怒りを含む意（含怒意）」と注している。さらに、朱子は「慍らずとは、非常に怒ることではなく、ただ心に不平不滿があるという意味で、それが慍るということだ（不慍、不是大故怒、但心裏略有些不平底意思、便是慍了）」（『朱子語類』論語二・學而時習之章・第四十七條）といい、「慍るは、かっと怒り出すという意味ではなく、ただ少し不愉快なことがあるということだ（慍、非勃然而怒之謂、只有些小不快活處便是）」（同上、第四十九條）という。朱子によると、君子は人に知られなくても、ほんの少しも不滿を持たない。朱注について、鵞峰は、次のように述べている。

今按ずるに、「慍」の字は怒りの外に發せざるを示す。故に朱子は「含」の字を以て注し、且つ「意」を加ふれば、則ち怒りの發せざること觀る可きなり。（今按「慍」字示怒之不發於外。故朱子以「含」字注、且加「意」、則怒之不發可觀也。）（『論語集注私考』中册）

朱子が「含」と「意」を加えたので、「慍」の意味は怒りを外に出さないという。鵞峰は朱子の説を受け継いで、已發未發論によって「慍」を解釋している。朱子によると、「性」は未發であり、皆善である。「情」は已發であり、善と惡の區別がある。そして、「性」は「體」であり、靜かで動かない。「情」は「用」であり、動いている。そのため、「怒」は「性」に對する「情」の一つとして、外に發するものである。鵞峰は朱子の説を敷衍して解釋している。

（二）「其爲人也孝弟」章の解釋

學而篇の第二章に、「有子曰く、其の人と爲りや孝弟にして、上を犯すを好む者は鮮し。上を犯すを好まずして、亂を作すを好む者は、未だ之有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か」とある。この章は、「孝弟」と「仁」の關係を論じている。これについて、昔から多種多樣な解釋がある[十]。「孝弟」は「仁の本」なのか、それとも「仁を爲す」本なのか。また、「仁」を「人」の意味に捉えて、「孝弟」が「人の本」或いは「人と爲りの本」と解釋するのか。漢代から六朝にかけて、孝弟は根本的な道德とみなされて、仁は孝弟を行った結果として生じてくる。しかし、宋代に至っては、孝弟は具體的な德目とされて、一方、仁は形而上と形而下の兩面性を與えられて、各學派は仁をめぐって自説を展開している[十一]。

『集注』では、「仁は、愛の理、心の德なり。仁を爲すは、猶ほ仁を行ふと曰ふがごとし。（中略）言ふこころは、君子は凡事に專ら力を根本に用ひ、根本既に立てば、則ち其の道自ら生ず。上文の所謂孝弟の若きは、乃ち是れ仁を爲すの本なり。學者此に務むれば、則ち仁道此によりして生ずるなり」と解説し、程子の解釋を引用して、「孝弟は、順德なり。故に上を犯すを好まざれば、豈に復た理に逆らひ常を亂すの事有らんや。德に本有り、本立てば則ち其の道充大す。孝弟、家に行はれて、後に仁愛物に及ぶ。所謂親を親しみて民を仁（いつく）

しむなり。故に仁を爲すは、孝弟を以て本と爲す。性を論ずれば、則ち仁を以て孝弟の本と爲す」と述べている。『集注』では、さらに次のように述べている。

或ひと問ふ、「孝弟は仁を爲すの本なり。此れ是れ孝弟に由りて以て仁に至る可きや否や」と。曰く、「非なり。仁を行ふは孝弟自り始むるを謂ふ。孝弟は是れ仁の一事なり。之を仁を行ふの本と謂ふは則ち可なり。是れ仁の本なりと謂ふは則ち不可なり。蓋し仁は是れ性なり、孝弟は是れ用なり。性の中に只だ箇の仁義禮智の四者有るのみ。曷ぞ嘗て孝弟有りて來らん。然れども仁は愛を主とし、愛は親を愛するよりも大いなるは莫し。故に曰く、孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か」と。

朱子は程子の説を繼承し、本體と作用の概念を用いて、孝弟が仁の根本ではなく、仁を行う根本であり、「性（理）」からみれば、仁こそ孝弟の根本であると主張している。つまり、仁は孝弟の本體であり、仁を實踐する孝弟は仁の作用である。

これについて、鵞峰は、

本朝の古注本は、「爲」の字無し。是れ書寫の脱落の誤りなり。按ずるに『漢書』に曰く、「傳に曰く、『其れ仁を爲すの本か』と。」師古の注に曰く、「傳は、『論語』を謂ふ」と。是れ由り之を見れば、「爲」の字を脱すること知る可し。況んや程子曰く、「孝弟は即ち是れ仁の本と謂ふに非ず。蓋し仁を爲すの本を謂ふか」と。（本朝古注本無「爲」字、是書寫脱落之誤也。按『漢書』曰、「傳曰『其爲仁之本與』。」師古注曰「傳、謂『論語』。」由是見之、脱「爲」字可知。況於程子曰、「非謂孝弟即是仁之本、蓋謂爲仁之本乎。」）（『論語集注私考』中册）

と述べており、『漢書』及び程子の説を引用し、日本の古注本に「爲」の字がないのは書寫の際に脱落したのであるとしている。この古注本は、足利本『論語』を指していると思われる。もし古注本に従うと、孝弟は仁の根本となり、仁は孝弟より低い位置に置かれてしまい、朱子が唱えた仁の重要性と一致しない。さらに、鵞峰は、この章における「仁」を「人」と讀むことを否定し、焦竑（字は弱侯）の説の一例を擧げて、次のように述べている。

按ずるに焦弱侯『筆乘』に曰く、「『爲仁』は『爲人』に作る」と。羅山先生曰く、「疑ふに夫れ漢儒の書寫の誤りなり。然れども雍也篇に曰く、『井に仁有り』と。仁は、人なり。若し之に従へば、則ち孝弟を以て人と爲るの本なり。是ならずと雖も、多聞に備ふ」と。（按焦弱侯『筆乘』曰、「爲仁」作「爲人」[十二]。羅山先生曰、「疑夫漢儒書寫之誤也。然雍也篇曰、『井有仁』。仁、人也。若從之、則以孝弟爲人之本也。雖不是、備多聞。」）（同上）

羅山によると、「仁」を「人」と讀むのは、漢代儒學者の誤りである。雍也篇に「井に仁有り」の「仁」について、何晏『論語集解』では、孔安國の説を引用して、「仁人井に墮つる（仁人墮井）」とあり、仁德のある人が井戸に落ちていると解釋している。朱子『論語集注』では、「劉聘君（名は勉之、字は致中）曰く、『仁有りの仁は、當に人に作るべし』と。今、之に従ふ」と解釋し、「仁」を「人」としている。しかし、この章の意味からいうと、「仁」を「人」とした

ら、孝弟が人となるの根本となり、このような解説は間違っているとしている。

（三）「吾與回言終日」章の解釋

爲政篇に、「吾と回と言ふに、終日、違はざること愚なるが如し。退いて其の私を省れば、亦た以て發するに足る。回や愚ならず」という孔子の言葉が見える。『論語集注』では、「違はずとは、意相ひ背かず聽受有りて問難無きなり。私とは、燕居獨處を謂ひ、進見請問の時に非ず。發とは、言ふ所の理を發明するを謂ふ」と解説し、「私」は、顏回が孔子にお會いして質問している時ではなく、一人でくつろいでいる時を指しているという。「退」と「省」について、『集注』では詳しく言及していないが、『論語或問』では、「程子、退省の二字に於いて、意は亦た同じからず。前説は以て孔子之を省みると爲して、後説は以て顏子の自省と爲す。恐らく當に前説を以て正と爲すべし」（巻二「爲政第二」）と述べており、孔子が顏回のことを觀察する、及び顏回が自分で反省するという二つの説を擧げて、孔子が顏回を觀察するほうが正しいとしている。さらに、『朱子語類』では、「これは、夫子が退いて、顏回の自分一人でいるのを觀察するということだ（此夫子退而省察顏子之私如此）」（「爲政篇下・吾與回言章」第七條）と明言し、孔子が退室してから顏回のことを觀察するとしている。

一方、『論語集注私考』では、羅山の解釋について、次のような問答が記録されている。

惺齋（藤原惺窩）、羅山先生に謂ひて曰く、「退省は、孔子の省みる所か。また顏子の省みる所か」と。先生曰く、「『大全』に據れば、則ち兩説存す。然れども朱注を熟讀すれば、則ち顏子を以て之を見て可なり」と。惺齋曰く、「朱子は、『燕居獨處』を以て之を注す。然れども疑ひ無きに非ざるなり」と。（惺齋謂羅山先生曰、「退省、孔子之所省乎。抑顏子所省乎。」先生曰、「據『大全』則兩説存。然熟讀朱注、則以顏子見之而可也。」惺齋曰、「朱子以『燕居獨處』注之、然非無疑也。」）（『論語集注私考』中册）

惺窩の質問に對して、羅山は朱子の注釋によって顏回が自分で反省すると考えているが、惺窩は朱子の「燕居獨處」という注釋に疑問を抱いている。

では、鵞峰は「退」と「省」についてどう解釋しているのか。『論語集注私考』では、次のように三つの説を引用している。

①『大全』に曰く、「私とは、他人知らざる所にして、回自ら知る者なり。夫子能く之を察す」と。又曰く、「此れ、夫子退いて、顏子の私を省察するなり」と。（『大全』曰、「私者、他人所不知而回自知者、夫子能察之。」又曰、「此夫子退而省察顏子之私也。」（『論語集注私考』中册）

②致堂胡氏曰く、「夫子、久しく已に顏子の愚ならざるを知り、必ず其（顏子）の私を退省するを曰ふは、以て無證の空言に非ざるを見す。且つ以て進德の功を明らかにし、必ず内外相ひ符し、隱顯一致にするに由る。學者の其の獨を愼むを欲す

るなり」と。（致堂胡氏曰、「夫子久已知顔子之不愚、必曰退省其私者、以見非無證之空言。且以明進德之功、必由内外相符、隱顯一致、欲學者之謹其獨也。」）（同上）

③『蒙引』に曰く、「退くは、即ち孔子退くなり。『吾』の字を承け來りて顔子の退くを謂へば、則ち下に『私』の字有る在り」と。（『蒙引』曰、「退、即孔子退也。承『吾』字來謂顔子退、則下有『私』字在。」）（同上）

『四書大全』によると、①の内容は朱子の言葉であるが、鵞峰は明示していない。そして、②は『四書大全』で引用された胡寅（號は致堂）の説である。③は蔡清『四書蒙引』の原文である。この三つの説は、前述した『論語或問』と『朱子語類』における朱子の見解と一致して、孔子が退室して顔回が一人でいるところを觀察するとしている。これからみれば、鵞峰の解説は羅山と異なっていることが分かる。

さらに、羅山は佛教や老荘について、次のように批判している。

或る人は羅山先生に問ひて曰く、「老子、智を棄つるなり」（『道德經』）と。『史記』に老子は孔子に告げて曰く、『君子、盛德にして、容貌愚なるが若し』（「老子韓非列傳」）と。莊子、顔子の坐忘を以て、聰明を黜（しりぞ）くと爲す（『莊子』大宗師）。此の章の『愚なるが如し』と、同異如何」と。先生曰く、「（中略）顔子、深潛純粹を以て、自ら睿智有りて、聖人と違はず。故に愚なるが如し。（中略）夫の老莊智を棄て、佛氏私を立て、一默無言（『維摩經』）を以て之を論ずる者の若きは、豈に孔子の無言（陽貨篇）、顔子の違はざること愚なるが如しと竝べて之を論ぜんや」と。（或人問羅山先生曰、「老子棄智也。『史記』老子告孔子曰、『君子盛德、容貌若愚』。莊子以顔子坐忘爲黜聰明。與此章『如愚』、同異如何。」先生曰、「（中略）顔子以深潛純粹、自有睿智、與聖人不違、故如愚。（中略）若夫老莊棄智、佛氏立私、以一默無言論之者、豈與孔子無言、顔子不違如愚竝論之哉。」）（『論語集注私考』中册）

老子や釋迦は孔子や顔回のような聖人と同列に論じてはいけないという。ここに、儒教を信奉して老荘と佛教を排撃する羅山の思想の一端が窺える。

（四）「子入大廟」章の解釋

八佾篇に、「子、大廟に入りて、事毎に問ふ。或ひと曰く、『孰れか鄹人（すうひと）の子を、禮を知ると謂ふや。大廟に入りて、事毎に問ふ』と。子、之を聞きて曰く、『是れ禮なり』と」とある。『論語集注』では、「孔子少きより禮を知るを以て聞こゆ。故に或る人此れに因りて之を譏る。孔子の『是れ禮なり』と言ふは、敬謹の至り、乃ち禮を爲す所以なり」と解釋し、さらに、尹焞の「禮とは、敬のみ。知ると雖も亦た問ふは、謹みの至りなり。其の敬爲ること、此れより大なるは莫し。之を禮を知らずと謂ふ者は、豈に以て孔子を知るに足らんや」（『論語集注』）という見解を引用している。朱子によれば、孔子が事毎に問うたのは、實際に禮を知らないからではなく、謹んで質問したのである。孔子が禮を知っていることについて、鵞峰は次

のように述べている。

①『大全』に曰く、「（中略）孟僖子病み、相禮するに能はず。二子をして夫子に禮を學ばしむ。齊の黎彌曰く、『孔某、禮を知りて、勇無し』と。則ち夫子、禮を知るを以て聞こゆること知る可し」と。

②又曰く、「知りて更に審問し、方に聖人の自足せざる處を見るべし」と。

③『論語或問』に曰く、「『夫子、既に問ふの後、又大廟に入り、則ち復た之を問ふか』と。朱子曰く、『否、知りて之を問へば、則ち僞に近し。若し問はざる所有れば、則ち之を問ふなり』」と。

④『直解』に曰く、「此の章と堯の欽明、舜の好んで問い、好んで邇言を察すとは、同意なり」と。

（『大全』曰、「（中略）孟僖子病、不能相禮。使二子學禮於夫子。齊黎彌曰、『孔某知禮而無勇。』則夫子以知禮聞、可知亦。」又曰、「知底更審問、方見聖人不自足處。」『論語或問』曰、「『夫子既問之後又入大廟、則復問之乎。』朱子曰、『否、知而問之則近僞。若有所不問、則問之也。』」『直解』曰、「此章與堯之欽明、舜好問而好察邇言同意。」）（『論語集注私考』下册）

①『四書大全』の引用文は、『左傳』昭公七年と定公十年の記載によるものである。つまり、歴史書の記録によって、孔子が禮を知っていることは明らかである。そして、②「又曰く」の内容も『四書大全』に引かれた朱子の説で、③『或問』の問答と同様に、孔子に知らないことがあって、人に質問したという。また、④張居正『四書直解』を引用し、孔子が事毎に問うのは、堯・舜の賢明さと同じ意味であると褒めている。

さらに、『論語集注私考』では、楊時（號は龜山）と王守仁（號は陽明）の説について、次のように批判している。

異説に曰く、楊龜山曰く、「曾子、君子の貴ぶ所の三道を舉げて曰く、『籩豆の事は、則ち有司存す』」と。王陽明も亦た曰く、「聖人の生れながら知るは、義理を以て之を言ふ。籩豆の事に於いては、則ち知る所に非ざるなり」[十三]と。世儒皆、之に從ふ。羅山先生曰く、「『中庸』に曰く、『聖人と雖も亦た知らざる所有り、能はざる所有り』と。故に楊、王に從ふ者は、粗之有り。然れども籩豆の事は、則ち有位者の爲す所に非らざるなり。如何ぞ初めに其の名物を知らずして、太廟に入りて事毎に之を問はんや。故に『集注』之を取らず」と。（異説曰、楊龜山曰、「曾子舉君子所貴三道、而曰籩豆之事、則有司存。」王陽明亦曰、「聖人生知者、以義理言之。於籩豆之事、則非所知也。」世儒皆從之。羅山先生曰、「『中庸』曰、雖聖人亦有所不知、有所不能。故從楊、王者粗有之乎。然籩豆之事、則有位者非所爲也。如何初不知其名物、而入太廟毎事問之乎。故『集注』不取之。」）（同上）

楊時と王守仁は、曾子の説に從い、孔子が禮器の竝び方などのこまかい技術的なことを知らないと考えている。これに對して羅山は、聖人にも知らないことやできないことがある。名物を知らないのに事毎に問うことはしないと反駁している。

朱子は『論語或問』では、

程子至れり。尹氏發明し、意尤も詳備す。呂氏、周氏の説、恐らく亦た或いは此の意有り。然れども其の本に非らざるなり。范氏、宗廟を立つるを以て民に孝を教ふると爲すは、則ち國を有つ者の其の親を思念するの誠心に本づかず。事毎に問ふを以て鬼神を敬ふと爲すは、則ち又、聖人の其の事を敬愼するの本意に非らず。謝氏の説の如きは、則ち是れ聖人、本もと是れを以て其の詆訐を當時に於いて肆(ほしいまま)にせんと欲し、既にして又、敬愼の説に託して以て之を文(かざ)るなり。其れ必ず然らざらん。楊氏以へらく、籩豆の事、夫子眞に知らざる所あり、恐らく亦た未だ安らかならず。夫の籩豆の事、特だに有位者の當に、其の間に察すべき所なるのみに非ず。豈に以て初めに其の名物を識らずして、必ず廟に入るを待ちて、後に問ふべしと謂はんや。侯氏、蓋し兼ねて程子、呂氏の意を引く。然れども亦た雜なり。

（『論語或問』巻三「八佾第三」）

と述べており、朱子は楊龜山の説以外に、呂祖謙・周伯忱・范淳夫・謝良佐・侯師聖の五人の説も列擧し、それぞれの不十分なところを指摘し、程子と尹焞の解釋を支持している。ところが、鵞峰と羅山は、『或問』で言及された楊龜山の解釋に王陽明の説をわざわざ加え、異説として批判している。明らかに、朱子學尊重の立場から陽明學を排斥しようとしている。

おわりに

鵞峰は林家の繼承者として、その思想や學風は父羅山から大きな影響を受けている。彼は朱子『論語集注』に基づいて『論語』を解釋し、明代の著作に對して強い關心を示している。數多くの程朱學關係の朝鮮本を讀んだ羅山（鵞峰も含む）の學問形成について、朝鮮の朱子學一色に染められたと指摘されているが[十四]、明代思想の直接の影響も度外視することができない。鵞峰が明代の儒學者の解釋を屢々引用した理由には、新渡來の思想や知識への關心はもちろん、近世儒學草創期の幕府の官僚として、清原家の學問と一線を畫し、朱子學を幕府の統治に根付かせるために、漢唐の古注も揚棄したとも言える。朱子の解釋と少し違いがあるが、全體からみれば、やはり朱子の『論語』解釋を踏襲して、佛教や道教の異學を排擊し、陸王學と峻別している。羅山と鵞峰が朱子學一尊主義で經學を解釋したことは、江戸時代において、朱子學の官學化及び日本儒學の發展に大きな影響を與えた。

羅山や鵞峰のような江戸前期の儒學者は明代の理學、特に朱子學を積極的に受容したことは明らかである。明末には政治腐敗や經濟崩壞に直面し、農民反亂が各地で蜂起した。朱子學は空論に走り、讀書人が出世して功名を求める手段となった。明朝滅亡の大變動を目にした思想家、例えば、王夫之、顧炎武らは、明代の心學に筆誅を加え、思想や學問に治世上の有用性を求める實學を掲げた。

一方、日本では、古代から中世にかけて、佛教が主流の思想となっ

た。江戸時代に入って、徳川將軍は實權を握ったが、名目上、天皇は國家の君主であって、中國のような易姓革命による政治的大變動はなかった。幕府は社會の安定や秩序の構築を保つために、朱子學を體制秩序を擁護する穩健な思想として尊重し官學化した。羅山と鵞峰は明代の著作を渉獵し、朱子學を普及推進する上で重要な役割を果たした。

（かん　がせん・言語文学専攻）

注

一　『鼇頭評註四書大全』は、胡廣編『四書大全』（徐九一太史訂正、金閶五雲居藏版、永樂十三年刊行）の和刻本（藤原惺窩輯、鵜飼石斎訓點、刊行年未詳。國立公文書館デジタルアーカイブからダウンロードできる）であり、内容に他の版本と異同がある。鵞峰はこの版本を參考したと思われる。以下、『四書大全』を言う場合は、全て『鼇頭評註四書大全』を指している。

二　佐藤錬太郎「王夫之『読四書大全説』――『集注』支持と『集註大全』批判――」（松川健二編『論語の思想史』、汲古書院、一九九四年）を參照されたい。

三　清原家の經學の詳細は、水上雅晴「清原家の『論語』解釋――清原宣賢を中心に――」（『北海道大學文學研究科紀要』第一二五號、六五～一一八頁、二〇〇八年）及び「清原宣賢の經學――古注の護持と新注の受容――」（『琉球大學教育學部紀要』第七六集、五一～六五頁、二〇一〇年）を參照されたい。

四　詳しくは、武内義雄『論語之研究』（岩波書店、一九三九年）、伊東倫厚「『論語』の成立と傳承」（松川健二『論語の思想史』所収、汲古書院、一九九四年）を參照されたい。

五　原文「等」を改める。

六　『千百年眼』の日本に與えた影響については、朱志先「張燧『千百年眼』在日本的傳播與接受」（『史志學刊』第四期、二〇一五年八月）を參照されたい。

七　『孔聖全書』（國立公文書館所藏刊本、三十五卷）卷一に「孔嘉父」を作るが、鵞峰は「孔父嘉」に改めている。

八　「學而時習之」章の解釋の詳細については、佐藤錬太郎「『論語』學而篇「學而時習之」章の解釋をめぐって」（『斯文』一二三號、二〇一三年九月）を參照されたい。

九　朱子の人性論について、詳しくは山井湧「朱子の哲學における『氣』」（『明清思想史の研究』東京大學出版會、一九八〇年）を參照されたい。

十　詳しくは、黄懐信『論語彙校集釋（全二冊）』上冊（上海古籍出版社、二〇〇八年）を參照されたい。

十一　孝弟と仁をめぐる解釋の変遷については、松川健二『宋明の論語』（汲古書院、二〇〇〇年）を參照されたい。

十二　『焦氏筆乘』卷三「人字」に、「孝弟即仁也。謂孝弟爲仁本、終屬未通。若如豊説、則以孝弟爲立人之道、於義爲長」とある。

十三　王守仁『傳習録』答顧東橋書に「曾子曰、『君子所貴乎道者三、籩豆之事、則有司存也。』（中略）謂聖人爲生知者、專指義理而言、而不以禮樂名物之類、則是禮樂名物之類無關於作聖之功矣」とある。

十四　羅山と朝鮮儒學との關係について、詳しくは阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』（東京大學出版會、一九七一年）一四九～二二八頁を參照されたい。